

幼児の語彙学習に及ぼす周辺事物の多様性効果の再検討

田村隆宏(鳴門教育大学)

語彙学習に関する従来の実験研究では、被験者の目前にターゲット事物を提示し、その事物に対して新奇語を命名して、その語が他の様々な事物にあてはまるか否かを被験者に判断させるという手続きがよく用いられてきた。語彙学習に関与している様々な要因はこの手続きを用いた実験研究によって明らかにされてきたといえる。

これらの研究では、ターゲットとして提示される事物は命名される新奇語の指示対象のみであることが多かった。この場合、命名された語がどの事物を指しているかは容易に判断できると考えられる。しかしながら、現実の語彙学習場面では語が命名される事物が単独で存在していることは稀であり、たいてい周辺に語意味と関係のない多くの事物を伴っている。この場合、命名された語が目前にある事物のどれにあてはまるかを判断することは容易ではない。このことは、現実場面における語彙学習には語意味と無関係な周辺事物を排除して語の指対象のみを抽出する認知過程が不可欠であることを示唆している。この点を考えると、語彙学習において指示対象の周辺事物がどのように影響しているのかを検討することは現実的な語彙学習過程を明らかにするという点で重要な意義を持つ。

指示対象に周辺事物が伴った場面で語彙学習を検討した実験研究も若干ではあるが存在する。Hall & Waxman (1993) [Child Development, 64, 1550-] は、3歳児を被験者として、車に乗っている熊に対して新奇語を命名し、この語の意味が基礎水準語“熊”として限定されるか、状況に制約された語“乗客”として限定されるかを検討した。その結果、新奇語の意味は“熊”として限定されやすいことを明らかにした。これに対して、田村(1997) [教心研, 45, 474-] は5歳児を被験者として、檻に入った象に新奇語を命名した場合、新奇語の意味が基礎水準語“象”ではなく、状況に制約された“檻に入った象”として限定されやすいことを明らかにしている。これらの研究結果の違いには、語彙学習に及ぼす周辺事物の影響を規定する要因の関与が反映されているものと考えられる。

その要因を探るべく、両研究を比較したところ、被験者の年齢、周辺事物の日常性、周辺事物の多様性、周辺状況の相対的大きさ、の4つの要因において違いが見られた。これらの違いに関わる要因が両研究の研究結果に違いを生じさせた可能性がある。田村(2001) [鳴教大紀要, 16, 1-6.] は、被験者の年齢(3歳vs 5歳)と周辺事物の日常性(檻に入った象vs 車に乗った象)の要因を操作した課題で語意味限定を検討した。その結果、これら2つの要因に関しては、語意味限定の違いを生じさせるものではないことが明らかにされた。さらに田村(2005a) [心研, 75, 487-] は、周辺事物の多様性(周辺事物が単一 vs 周辺事物が複数)、周辺状況の相対的大きさ(周辺状況小 vs 周辺状況大)の要因を操作した課題で語意味限定を検討した。その結果、周辺事物が多様に存在する場面、及び周辺状況が相対的に大きい場面でターゲット事物に新奇語を命名した場合には、被験者は新奇語を周辺事物を含めない意味である“象”と判断されやすいことが明らかにされた。これらの研究から、周辺事物の多様性と周辺状況の相対的大きさに関わる要因が周辺事物を含める誤りを抑制することに影響していることが示唆された。

ただし、田村(2005a)の実験課題では周辺事物の多様性が高い条件は周辺事物が存在する範囲が相対的に大きい状況を必然的に含んだものであり、厳密に考えると周辺事物の多様性の影響ではなく、相対的大きさ要因のみの影響で生じた結果である可能性が否定できない。この可能性を排除するために田村(2005b) [日心・発表論文集, 922] は、周辺事物の存在する範囲が相対的に小さい状況において周辺事物の多様性の効果を検討し、確かに周辺事物の多様性効果が存在することを確認している。

しかし、田村(2005b)の周辺事物の多様性が高い条件で提示された場面は、象(ターゲット事物)の周囲に複数の事物が存在しているものであったのに対して、多様性が低い条件では檻に入った象であった。多様性高条件での複数の事物が周囲に存在している場面では、事物は象と接触しているわけで

はないため、象に対してそれほど近接度が高くない周辺事物として認識されると考えられる。一方、多様性低条件での檻はその中に入っている象に対して近接度の高い周辺事物として認識されると考えられる。このようにターゲット事物に対する周辺事物の近接度の認識が異なっているとすれば、田村（2005b）の結果にこの違いが反映されている可能性もある。

そこで本研究では、ターゲット事物に対する周辺事物の近接度の認識を同様にした上で、周辺事物の多様性効果の有無について改めて検討する。

【方法】 被験者 5, 6 歳児50名であった。

材料 周辺事物の多様性低条件では檻に入った象 a をターゲット事物として提示した。周辺事物の多様性高条件では、象 a（ターゲット事物）の周辺に他の動物や事物（ネズミ、リス、スズメ、ハト、金魚、カブトムシ、はさみ、鉛筆）が存在し、かつ象と複数の事物がすべて檻に入っている状況を提示した。この場合、多様性高条件でも近接度が高い周辺事物である檻が存在するため、多様性の効果が見られた場合に、周辺事物の近接度の違いは結果に反映されず、純粋な周辺事物の多様性効果の存在が確認できる。

判断事例は、多様性低条件では檻に入った（象 a , 象 b , 虎 a , 虎 b , ）、檻に入っていない（象 a , 象 b , 虎 a , 虎 b ）、檻のみ、鉛筆、ハサミの11事例が提示された。多様性高群では多様性低群の判断事例のうち、檻に入った4事例の代わりに複数の事物に囲まれて檻に入っている4事例（象 a , 象 b , 虎 a , 虎 b ）が提示された。また、多様性高群の判断事例では、近接度の高い檻だけを含めた語意味限定がみられることも予想されることから、それを査定するために、檻に入った（象 a , 象 b ）の事例を加えた13事例が提示された。

手続き (1)新奇語命名 ターゲット事物（象 a ）に対して「これはよその国の言葉でケクといいます」と新奇語を命名した。

(2)新奇語意味限定 判断事例をすべて提示（同時提示）して「この中にケクがあるか探してください」と教示し、実験者が1事例ずつ指さして「これはケクだと思いますか？」と質問して、「はい」か「いいえ」の回答を求めた。

【反応者の分類】 状況制約解釈者 標本事例と同

じ状況の事例にしか新奇語を適合させなかった者、即ち、多様性低群では檻に入った象 a と象 b のみに「はい」反応した者であり、多様性高群では複数の事物に囲まれて檻に入っている象 a と象 b のみに「はい」反応した者である。

事物名解釈者 新奇語を事物名「象」として意味限定した者。即ち、いずれの条件も檻や複数の事物の有無に関係なくすべての象の事例に対して「はい」反応した者である。

その他解釈者 上記以外の反応をした者。

【結果と考察】 Tableは周辺事物の多様性低条件と多様性高条件の各解釈者の人数と割合を示したものである。条件間の各解釈者の人数に関して χ^2 検定を行ったところ、状況制約解釈者の人数に関しては、多様性低条件における方が多様性高条件におけるよりも有意に多かった（ $\chi^2(1)=4.02$, $p<.05$ ）。これに対して、事物名解釈者の人数に関しては、多様性高条件における方が多様性低条件におけるよりも有意に多かった（ $\chi^2(1)=5.20$, $p<.05$ ）。なお、多様性高群では象のみが檻に入ったものだけを選んだ被験者はいなかった。

状況制約解釈者が多様性高群におけるよりも多様性低条件における方で多く、事物名解釈者が多様性低条件におけるよりも多様性高条件における方で多かったことは田村（2005b）の結果を再確認するものであった。ただし、本研究の多様性高条件では田村（2005b）の多様性高条件で提示された周辺事物の近接度が低い状況とは異なり、近接度が高い状況にあり、多様性高条件、低条件とも周辺事物の近接度がともに高く、近接度に関して違いがみられない状況であった。それにもかかわらず、状況に制約されない語意味限定に際して多様性の効果が見られたということは、田村（2005b）で見られた多様性の効果の存在を示唆する結果が決して周辺事物の近接度の認識の違いから生じたわけではないことを示唆している。このことから、語意味限定における純粋な周辺事物の多様性効果の存在が再確認された。

Table 各解釈者の人数（%）

	状況制約	事物名	その他
多様性低	14 (56.0)	7 (28.0)	4 (16.0)
多様性高	7 (28.0)	15 (60.0)	3 (12.0)